

日本在宅 医学 学会 雑誌

Vol.14 No.1

The Japanese Academy of Home Care Physicians

○巻頭言 医療の転換期における在宅医療の役割	前田 憲志	1
○大会長講演 これからの大学病院のありかた	服部 信孝	5
○大会記念合同シンポジウム「在宅医療・ケアへのIT導入 現在そして未来」 (シンポジスト:原 量宏, 矢口 忠博, 川島 英敏, 有倉 陽司, 工藤 憲一)		9
○シンポジウム1「在宅医学会記念シンポジウム」 (シンポジスト:上 昌広, 小野沢 滋)		17
○シンポジウム2「神経難病に対する神経内科の役割と在宅医との連携」 (シンポジスト:伊藤 和則, 山田 恵子, 荻野美恵子, 川島乃里子, 村山 繁雄, 高尾 昌樹, 初田 裕幸, 小幡 真希, 齊藤 祐子)		19
○シンポジウム3「在宅医療のあるべき姿と10年後を見すえた在宅医養成」 (シンポジスト:大蔵 暢, ラブレツィオーサ 伸子, 平原佐斗司, 川越 正平)		25
○シンポジウム4「在宅医療の死生学」 (シンポジスト:会田 薫子, 岡部 健, 平原佐斗司, 佐々木静枝)		31
○シンポジウム5「多職間交流community維持のための実践医療と介護の情報連携」 (シンポジスト:太田 秀樹, 福地 将彦, 長島 晃司, 大関 美穂, 荒井 康之, 小笠原文雄, 岡田 晋吾, 田城 孝雄)		37
○ワークショップ1「在宅医療 大学からの発信」 (シンポジスト:葛谷 雅文, 鈴木 裕介, 高橋 和久, 矢野 哲郎)		45
○ワークショップ2「pick up presentation」 (シンポジスト:レシャード カレッド, 片岡 英樹, 廣瀬 光, 小谷 泰子, 野原 幹司, 橋爪 聖子, 高井英月子, 阪井 丘芳, 高井英月子, 阪井 丘芳, 神永 洋彰, 鶴谷 理栄, 長谷川 諒, 渡部 健, 小木田彩香, 長谷川仁志, 市原 利晃, 佐々木 亨, 高橋 彩子, 藤原るみ子, 土岐 一洋, 鈴木 嘉彦, 桑原 直行, 西崎 久純, 川島 久佳, 佐々木潔子, 仲田 勲生, 川島孝一郎)		51
○ワークショップ3「在宅医療連携拠点事業」 (シンポジスト:板垣 園子, 木村 幸博, 安東いつ子, 川越 正平, 中里 和弘, 天野 博, 片山 史絵, 丹野 直子, 中里 和弘, 天野 博, 片山 史絵, 丹野 直子, 川越 正平)		61
○ワークショップ4「優秀ポートフォリオからえられるもの」	(シンポジスト:横林 賢一, 川越 正平)	67
○教育セミナー1「認知症① 認知症治療薬の選択」	(シンポジスト:遠藤 英俊)	71
○教育セミナー2「小児在宅医療」	(シンポジスト:前田 浩利)	75
○教育セミナー3「認知症② 認知症の方の在宅医療」	(シンポジスト:苛原 実)	77
○教育セミナー4「死生学総論」	(シンポジスト:清水 哲郎)	79
○在宅医学会指導医大会「プリンシプルを学ぶ」シリーズ第2回	(シンポジスト:草場 鉄周, 佐伯 俊成)	81
○勇美記念財団助成シンポジウム公開市民講座	(シンポジスト:菅谷 昭, 永井 康徳, 佐藤美穂子)	85
○佐藤智賞受賞発表:小松 裕和, 北澤 彰浩, 朔 哲洋		93
日本在宅医学会雑誌投稿規定		97
連絡票		99
投稿承諾書		98
編集後記		100

医療の転換期における在宅医療の役割

一般社団法人日本在宅医学会 代表理事 前田 憲志



わが国の高齢化の進展や疾病構造の変化に伴い、医療福祉体系が大きく変わろうとする時、日本在宅医学会が佐藤智会長のもとに発足しました。「人の全生涯にわたって、質の高い生涯をおくれるように支える」とのスローガンのもとに医療と介護を在宅で行う活動が続けられ、学術大会の開催、学会誌の発刊、教科書発行が行われ、専門医制度が発足しました。第二代前沢政次会長のもと、指導医ならびに研修指導施設の認定が行われたことにより認定試験制度も充実し、専門医の養成も順調に進んでまいりました。一方、わが国の医療福祉体系は、介護保険制度の導入に続いて在宅療養支援診療所の創設が行われ、地域で在宅を中心として生涯を支える医療福祉制度の推進が着々と進められています。

本学会も平成23年12月に一般社団法人日本在宅医学会が前沢政次代表理事のもとに発足し、旧任意団体の日本在宅医学会を引き継いで、平成24年4月1日より一般社団法人日本在宅医学会が新たな理事構成のもとに発足いたしました。これに伴い、この度、私が代表理事を務めさせていただくこととなりました。4月1日からは機能強化型在宅療養支援診療所制度も創設され、在宅での医療・介護が更に強力に推進されることとなりました。この国策にそって、本学会も会員の拡充、教育の推進、特に、多職種協働による在宅での医療・介護のより効果的な連携を求めて、多職種協働の教育研修に力を入れてまいります。また、この在宅医療制度は地域偏在が少なく、広く、全国での平準化が求められますので、各地域での活動を活性化させていくことも重要な課題と認識し、活動を推進してまいります。更に、この医療福祉分野は長年培われてきた施設医療とは異なった環境の中で、一人一人の生活を支え、生きる力を引き出しながら療養支援を行なう必要があります。新たな研究・開発が求められています。支援対象者は年々増加し、この分野は医療福祉領域の中で大きな割合を占めることとなります。佐藤智初代会長の「医とは何か」の原点を忘れることなく、広大な未知の分野を含むこの医療福祉領域を開拓し、急速な需要に対応できる成果を挙げて行くためには、多数の会員の努力が必要となります。新しい会員のご参加と会員諸氏の個性溢れるご精進に期待するものであります。

上記の趣旨を踏まえた新しい試みとして、第14回日本在宅医学会大会（大会長 服部信孝順天堂大学医学部神経学講座教授）と第16回日本在宅ケア学会学術集会（大会長 原礼子慶應義塾大学看護医療学部教授）が共同開催され、本号に内容が掲載されています。在宅医療の学問体系の構築も重要な課題であり、広く、引きつづき学会誌へのご投稿をお願い申し上げます。